

パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査（五）

——ミルンベイ州トパにおける調査概報——

高橋龍三郎・井出浩正・根岸 洋
中門亮太・根兵皇平

はじめに

昨年まで、ミルンベイ州のケヘララミッションを中心に調査し、親族構造や未開社会における家庭的土器生産に関する民族誌についてデータを収集してきた（高橋他 二〇〇八）。二〇〇七年度は、文部科学省の科学研究費の助成を受けて、ケヘララおよびトパミッションにおける集中的な民族誌調査を実施した。本報告は、二〇〇七年度の調査成果について、参加者がまとめたものである。

トパミッションでは、母系クランから構成される人々が村々を形成し、その多くは海岸線に沿ってのびる低平な海浜と、それから内陸地にいたる斜面部に立地している。人々

は海での漁労のほかに、バナナやタロイモ、ヤムイモ、ココナツヤシなどの栽培、ブタの飼育などによって生計をたてている。

今回の調査の主目的は、イースト・ケープ伝統の土器型式が、西方にどこまで拡大しているかの範囲を確認すること、また分布に影響を与えたと考えられる親族構造上、婚姻関係の実態を把握することであった。今回はそれらの本格的調査に備えて、地理的データなど基礎的データの収集を進めるために、集落や家屋の位置についてGPSで記録しながら実施した。これらは来年度以降の最終的な調査計画を実施する上で必要な情報を得ることを目的にしている。親族構造や婚姻関係が、実はそのような地域社会を背景に実態として機能しているからである。

表1

日付	行程・調査内容	調査地
8月11日	成田空港→ジャクソン国際空港 (ポートモレスビー)	
8月12日	ジャクソン国際空港→ガーニー空港 (アロタウ) →トパミッション 宿泊するダワタイ村周辺を踏査	ダワタイ村
8月13日	・D女史の親族調査、土器製作実見 ・ダワタイ村一般に関する聞き取り調査	クッピクッピヤ村
8月14日	・D女史の親族調査 ・所有土器の写真撮影・断面実測	クッピクッピヤ村
8月15日	・高橋・中門：GPSにて集落配置の簡易測量調査 ・井出・根岸・根兵：土器観察表の作成	クッピクッピヤ村、 他トパミッション
8月16日	・高橋・中門：GPSにて集落配置の簡易測量調査 ・井出・根岸・根兵：土器に関する聞き取り、午後にGPS班合流	クッピクッピヤ村、 他トパミッション
8月17日	・高橋・根岸：ミルンベイ州観光局 (アロタウ) 訪問 ・井出・中門・根兵：ダワタイ村で表面採集調査	ダワタイ村
8月18日	・高橋：ダワタイ村の親族調査　・井出・根岸：土器の写真撮影等 ・中門：GPS測量調査　　・根兵：家屋の測量調査 ・全員：ダワタイ村に所在する洞窟の踏査、土器片採集	ダワタイ村
8月19日	・ググヒニボララ村に関する調査、所有土器について聞き取り調査 ・マジックツアーズ社社長を迎える	ググヒニボララ村
8月20日	・高橋・根岸：ミルンベイ州庁舎 (アロタウ) 訪問 ・井出・中門・根兵：土器実測、後にアロタウで合流	ダワタイ村
8月21日	・高橋：調査報告書作成　・井出・中門：表採土器の実測 ・根岸・根兵：ググヒニボララ村の親族調査、所有土器について聞き取り調査	ググヒニボララ村
8月22日	・高橋・井出・根兵：D女史の土器焼成を実見、表採土器の実測 ・根岸・中門：ググヒニボララ・ムトゥユワ・スィクワラ村で聞き取り調査 ・全員：ダワタイ村の墓地を訪問	クッピクッピヤ・ググヒ ニボララ・ムトゥユワ・ スィクワラ村
8月23日	・井出・根岸・中門：ドゥリア・イェルサレム村にて聞き取り調査 ・根岸・中門・根兵：トパの南海岸をGPS測量、聞き取り調査	ドゥリア・イェルサレム村、 他ケヘララミッション
8月24日	・高橋・井出・中門・根兵：ダワタイ村→アロタウ→ガーニー空港→ポ ートモレスビーに宿泊 ・根岸：残って個人調査 (9月14日まで)	ダワタイ村
8月25日	高橋・井出・中門・根兵：ジャクソン国際空港→成田空港	

調査では、目的に沿うように、各村を訪問して各家々で土器を確認し、それを写真・図面に記録しながら、併せてその由来と親族構造について聞き取ることを主眼にした。

なお調査は、早稲田大学の高橋、井出、中門、根兵が役割分担を決め、東京大学大学院生の根岸洋が現地で協力した。

(高橋龍二郎)

1. 二〇〇七年度の調査概要

調査は八月十一日より同二五日までの二週間、トパ内のダワタイ村を基地として周辺の村落において実施した。ケヘララ周辺を調査対象にした二〇〇六年度に引き続き、その西方に隣接するトパを選んだ。調査分担として、親族調査を高橋が、GPSを用いた村落配置の測量調査を中門が、土器調査を井出・根岸が、住居建築の調査を根兵が、それぞれ担当した。また調査対象地で採集された先史時代の土器の調査も行ったが、今回の報告ではそれらは反映していない。また調査行程については表1を参照して頂きたい。

(根岸 洋)

2. 地形と集落

(1) イーストケープの地理的環境

イーストケープ (East Cape) は、ニューギニア本島最東端のミルンベイ州に属する。州都アロタウからは東へ約五十キロメートル離れ、海を隔てるとヌアカタ (Nuakata) 島や、二〇〇五年度及び二〇〇六年度調査地であるヤバム (Yabam) 島、パヒレレ (Pahilele) 島がある。ニューギニア島の他地域と同様、熱帯雨林季候に属する

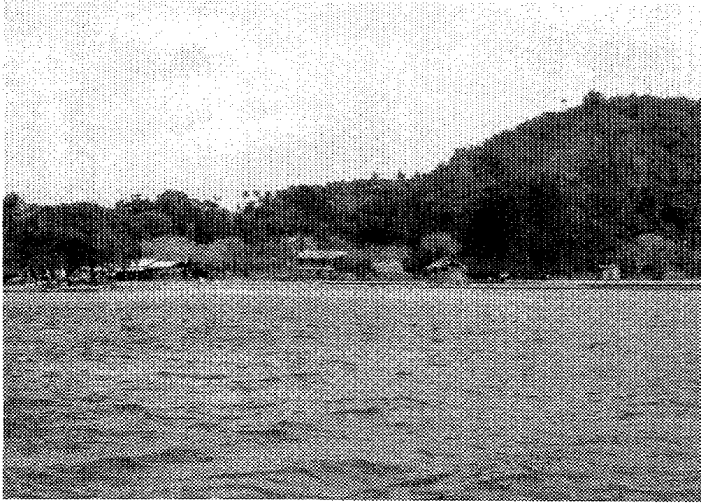


写真1 トパの遠景 (北から)

本地域ではあるが、

首都のポートモレスビーなどと比較すると、雨季と乾季の時期にズレが見られる。これはモンスーンの影響によるものだと考えられる。

今年度の調査地であるダワタイ村を中心とした地域では、砂礫や玄武岩、石灰岩が堆積する。また、

周囲を遠浅のサンゴ礁が取り巻き、概して砂浜は少なく岩礁によって海岸部を形成している。半島の北・東海岸沿いは起伏の少ない平坦地であるが、内陸へ少し進むとすぐに丘陵地帯が広がる (写真1)。公道や集落のほとんどは、この平坦面に沿って形成される傾向にある。一方、ミルン湾に接する南側ではこのような平坦面の割合はさらに少なく、北海岸とは違った景観を持つ。南海岸沿いには集落や公道はほとんどなく、むしろそれらは海岸面より一段高い内陸部に配されるようである。

(2) 集落配置

昨年度の調査に引き続き、今年度もGPSデータを用いて海岸線と集落の配置図を作成した (図1)。ただ、調査の時間的制約もあり、集落配置に関しては北海岸のデータのみとなってしまった (内陸部や南海岸の集落については次年度の調査で行う予定である)。今回調査したダワタイ村周辺では、八つの村の存在を確認できた。特徴的な点として、北海岸に沿って位置する集落それぞれには、南海岸側にもそれと対応した村が各々存在することである。この関係はバラバラナと呼ばれ、親族組織と村の配置関係を考えていく上で、非常に興味深い。

また、集落と集落の間に形成された墓域の存在も確認し

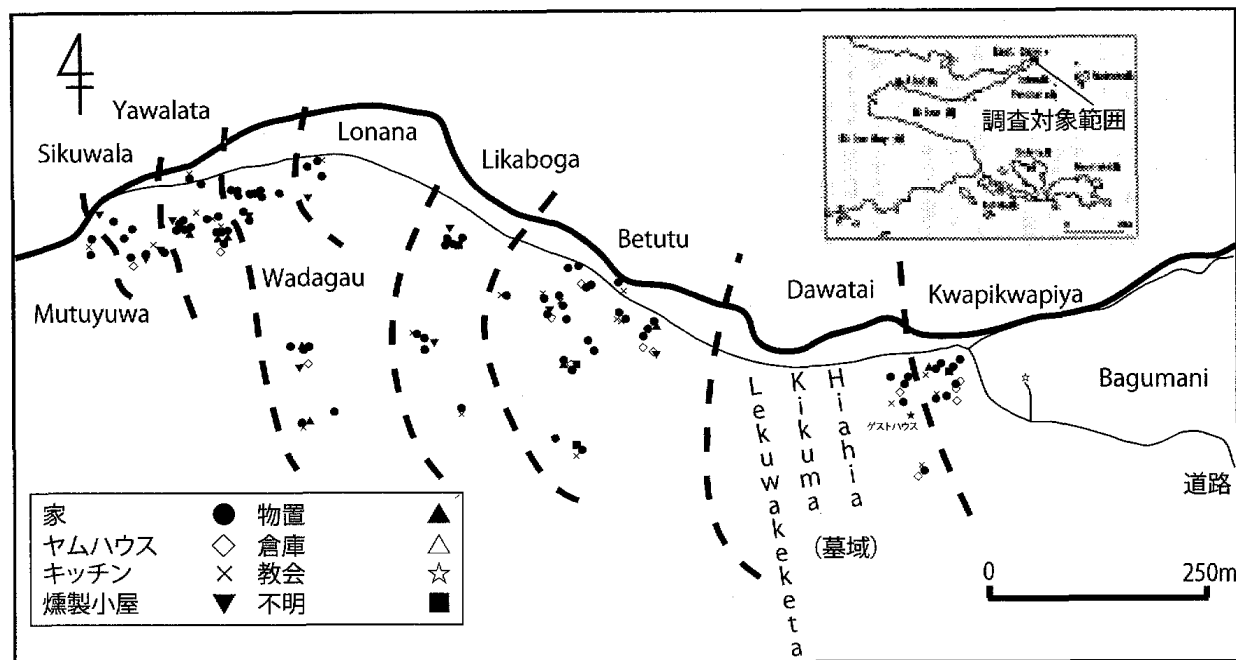


図1 トパミッションの集落配置

魚類を保存する燻製小屋なども分布している。集落は公道側に入り口を持ち、内陸側に向かって広がる(写真2)。村同士の境界に明確な見印はないが、ダワタイ(Dawat'ai)村とバグマニ(Bagumani)村のように河川で領域を定めるなど、自然地形を利用している場合もある。

細谷葵氏は二〇〇五年度の調査において、ヤム島の集落配置について紹介する中で、「公道から内陸・山側に向かって、もっとも公道に近いところにキッチン、次に寝室、



写真2 集落の様子

集落内の施設に関しては前年度までの調査成果とほぼ同様な結果が得られた。一般的な居住施設である高床式住居の他、ヤムハウスと呼ばれるヤムイモ貯蔵施設の高床式倉庫、炉を持ち柱と屋根のみで構成される簡素な造りのキッチン、主に

一番山側がヤムハウスという建物の配置が一般的である」と述べる（高橋他 二〇〇七）。今回調査した各村々では、必ずしも全てが同様な順序で配列されてはいなかったが、ヤムハウスに関しては、大部分がやはり住居施設より内側（山側）に位置する傾向が見られた。

（3）高床式住居（写真3）

集落の構成要素の一つである高床式住居の典型的な構造について、ここではインフォーマントH（図2参照）家の

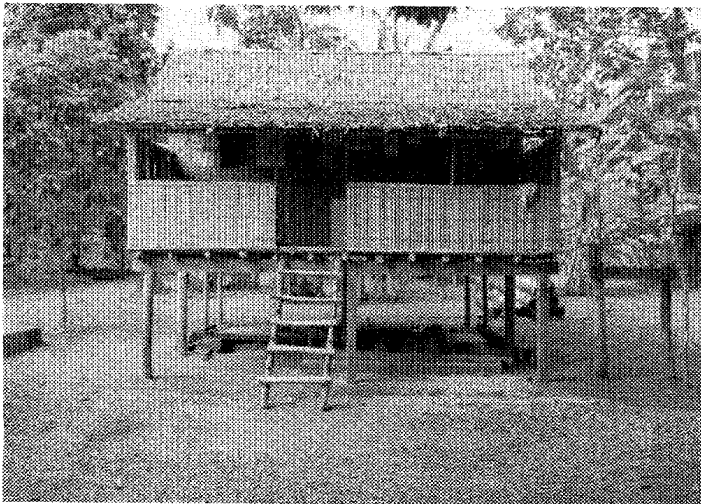


写真3 高床式住居

例をあげて紹介する。

五一〇×四八〇センチの面積に十二本の柱を据えた、縦長で長方形の住まいである。地面から1メートルほどの高さにそろえた柱の上に、格子状に木材を並べて床面を形成、内部空間を構築する。出入り口は、木材を階段状に組んだ造りと

なっている。

住居の内部は大きく二つの部屋に分かれているが、どちらも寝室とのことであった。建材に関して、柱などには特定の樹種を用いるということはないが、屋根や壁にはサゴヤシの葉が好まれて使用されるらしい。

この住居のように、炉等の施設がキッチンとして母屋とは別に作られる場合は多い。しかし、中には家の庇を倍ほどに伸ばして設けた屋根下の空間に、炉を据えつけて母屋とセットにしている住居事例も数多くあった。

（根兵皇平）

3. 親族調査

（1）親族構成

これまでの聞き取り調査において、トパミッションの出身者と血縁関係にある者の存在は、多数確認されている（高橋他二〇〇七、二〇〇八）。ここでは、今年度調査で確認された、いくつかの親族構成の例について報告する。

①ダワタイ (Dawat'ai) 村 (図2)

今年度調査でベースキャンプを置いたダワタイ村は、トパミッションの北岸地域のほぼ中央に位置する。ダワタイ

村の西部には、ヒアヒア (Hiahia) 、キクマ (Kikuma) 、レクワケケタ (Lekuwakeketa) という三つの地域を挟んで、隣の集落であるベトゥトゥ (Betutu) 村へ通じる (図1)。これら三地域はいずれもダワタイ村の所有地であり、ヒアヒアは墓域として利用されている。なお、キクマ

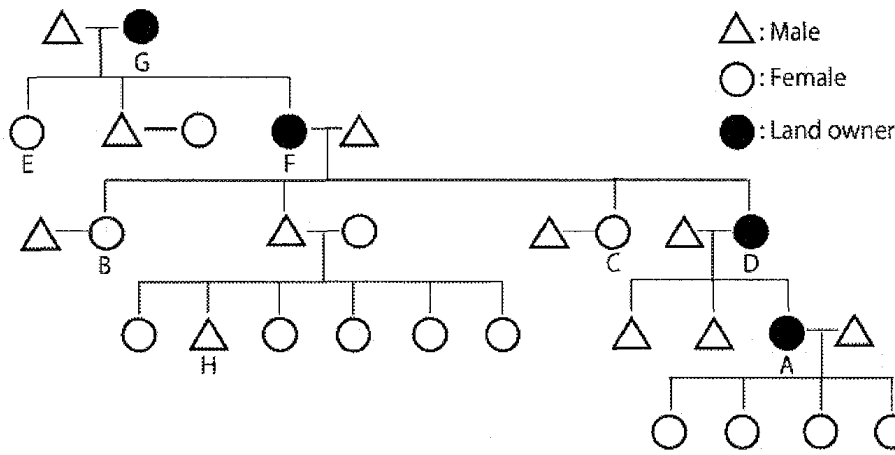


図2 Dawatai村のファミリーツアー

にはスカルケープ (Skull Cave) があるとのことであった。ダワタイ村では、主にAとHをインフォーマントに聞き取り調査をおこなった。Aは現在のダワタイ村のランドオーナーである。Hは村の系譜を継ぐ最年長の男性であり、一族に関する知識が最も豊富であるという。結果として、ダワタイ村ではAから三世代前までさかのぼる系譜

を確認することができた。土地所有権はケハラと同様、母系を通じて受け継がれる。ランドオーナーは血縁者のみならず、克蘭の成員からも“mother”、あるいは“sister”と呼ばれ、大きな力を持つ。先に述べたヒアヒアもダワタイの所有地であるため、所有権は同様に受け継がれる。

②ググヒニポララ (Guguhinipolala) 村 (図3)

ググヒニポララ村はダワタイ村のほぼ真南に位置している。一族の系譜は古くさかのぼるが、集落自体は五〇年ほど前に形成された新しい集落である。

ググヒニポララ村ではJとその息子であるIをインフォーマントに聞き取りを行った。ググヒニポララ村にはユナイテッドチャーチによって作成されたファミリーツリーが保管されており、それをもとに各人の出身地や婚姻、仕事に伴う移動などについて調査を行った。ググヒニポララ村では、Jから六世代前までさかのぼる系譜を確認できた。ググヒニポララ村は、Jの父親であるKによって形成された。Kはダワタイ村の出身であり、マリボイ (Maliboi) クランの系譜である。男性であり土地所有権は持たないため、ダワタイ村によってググヒニポララ村の土地を与えられたという形になっている。現在Kは亡くなっており、自身が属するマリボイ克蘭の墓地であるヒアヒアに埋葬されて

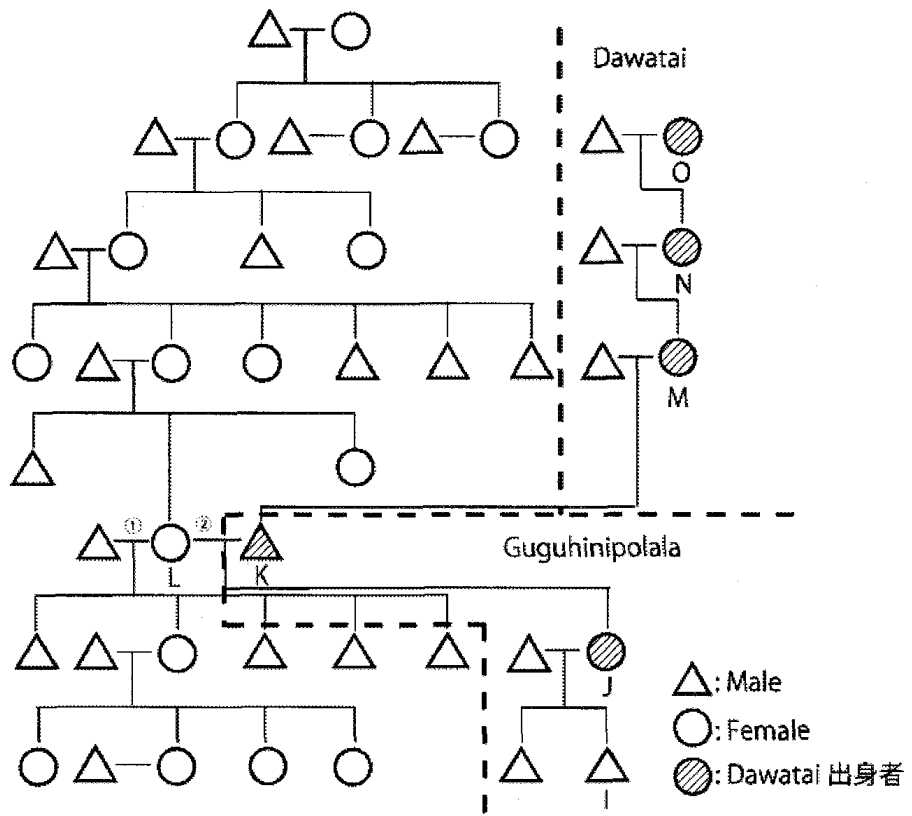


図3 Guguhinipolala村のファミリーツアー

いる。この場合、本来であれば、Jは母方の土地へ戻らなければならぬが、JはランドオーナーであるAに「テレゲレタナ (telegelētana)」といわれる、異なるクラン間での人の受け入れを認められたため、現在も居住を許されている。このため、JとAは血縁関係もないシクランも異

なるが、土地所有権の関係から、JはAを“mother”と呼んでいる。

また、Mから遡る母系の系譜は、かつてダワタイ村の隣にあるヒアヒアに住んでいた。しかし、ヒアヒアは古くから墓地としても利用されており、キリスト教の導入に伴って墓地と同じ地に住むことはよくないとされ、GがOをダワタイ村に受け入れたという。これは両者が同じクランであったため、特別な承認や代償等は必要としなかったという。

(2) クランとトーテム

ミルン湾周辺では鳥、蛇、魚、植物などをトーテムとするクランの存在が先行研究により知られている(中門二〇〇八)。これまでのイーストケープにおける調査では、鳥をトーテムとするクランが確認されている。現地語でクランを表す言葉は「ググニ (guguni)」であり、特定の場合占有・居住する権利、特定の場合で農耕・漁労を行う権利など、重層的な意味合いを有する単語である。

① クラン

トパミッシュンにおいては、五つのクランを確認することができた。その内、ヘヘゴ (Hehego) / モデワ (Modewa)

表 2

クラン(clan)	トーテム(totem)				集落(hamlet)
	bird	fish	snake	plant	
Garuboi	Maliboi	Bahibahi	Garuboi	?	Dawatai
					Guguhinipolala
					Mwamwaya
Hehego	Gabubu	Tuhilili	?	?	Yawalata
Magisubu	Magisubu	?	Keukeula	?	Sikuwala
	Takowa				Kelakela
	Binama				
Modewa	Kelolo?	Keboliya	?	?	
Kehoi	Kehoi	?	Hanauli	?	Bagumani?

は、昨年度調査でケヘララミッションにおいて同名のクランが確認されている。これらはバードトーテムも同一であり、何らかの関係があるものと思われる。また、ガルボイ(Garuboi)については、Seligmann の先行研究の中で、ミルン湾を挟む南側の半島に位置する、ワガワガ (Wagawaga) において確認されている (Seligmann 1910)。ガルボイは蛇の名前でもあるため、スネークトーテムは同一であるが、バードトーテム、フィッシュトーテムは別名のもものが報告されている。このガルボイクランが由来をいつにするものか、名前が

同じだけで異なる由来のものかは追加調査を要する。

② トーテム

トーテムは、ケヘララミッションでは確認できなかったスネークトーテム、フィッシュトーテムを確認することができた。ケヘララでは、バードトーテムしか確認できず、先行研究においても当該地域では特にバードトーテムの重要性を見ることができない。しかし、先述のダワタイ村では、トーテムに関する聞き取りを行った際、真っ先に返答されたのはスネークトーテムであるガルボイ (Garuboi) であった。ダワタイ村はバードトーテム (Maliboi) も有するが、一般的にトーテムとして認識しているのはガルボイであるという。フィッシュトーテムに関しては、モニュメントの存在を確認することができた。モニュメントはトパにはなく、ケヘララの教会区に残されている二本の石である。一方で、トーテムに関するタブーは、ケヘララと同様、忘れ去られてしまったのか確認できなかった。

(3) まとめと展望

今次調査では、これまでの調査に引き続き親族調査においてもデータを蓄積することができた。これらのデータはいずれも一地域のみでは完結せず、トパミッションとケヘ

ララミッシュン、あるいはヤバム島、パヒレレ島とのつながり、移住の関係を認められることが明らかになってきた。

土地所有や居住については、昨年度調査と基本的に同様な様子を確認することができた。その中で、特に土地所有者（ランドオーナー）の存在の大きさが確認された。今年度調査では、異なるクランの人間を受け入れるテレゲレタナという仕組みを確認できた。昨年度調査において、ケヘララミッシュンではそのような場合、クランに属する集落の長（最年長の男性）同士が話し合っただけで決めることであつた。しかし、ダワタイ村とググヒニポララ村の関係においては、ランドオーナーであるAの力による側面が強く見える。このことは血縁関係がなくとも、その土地に住む者はその土地のランドオーナーを“mother”、“sister”と呼ぶ慣習からもうかがえる。

今次調査における大きな成果の一つに、スネークトーム、フィッシュトームの確認があげられる。特にフィッシュトームは、モニメントが残されており、その建立の経緯からトパミッシュンとケヘララミッシュン間の交流を想定することができる。各ミッシュンはキリスト教の伝来に伴う行政的区分であるため、必ずしも各クランや親族の広がりとは一致しないであろうことは想像に難くない。

一方で、今年度は日程上の都合から、昨年度ケヘララで確

認できた半島北岸と南岸の村の間における土地所有や居住、土地の分割などの関係を十分に調査することができなかった。ダワタイ村とググヒニポララ村の例が同様の仕組みによるものかは追加調査を要する。次年度はトパにおける北岸と南岸の村の関係、丘陵地に形成される畑の所有権も含めて追加調査をする必要がある。（中門亮太）

4. 土器製作について

(1) 特定個人の土器製作技術

トパには、土器製作の偉大な「名人」と称される製作者（D女史）が居住している。本項では彼女が持つ卓越した製作技術を概述し、彼女以外の土器製作者との比較に備えたい。

① 粘土の調達・下地準備

粘土の調達は、村の南方にあたる丘陵地（deona）にて採掘する。この採掘地について、D女史が住む村やコミュニティが採掘に関する権利を有しておらず、採掘孔等の観察は見送ることとした。

粘土は調達の後、しばらく家やヤムイモハウスなどの軒先で乾燥させておくのが通例である。その期間もまちまち

で季節にも左右され、一週間から数ヶ月までと幅広い。氣候要因のみならず、土器の製作を見越した粘土の調達と共に、粘土のある程度の保管・備蓄などの目的もあると推測される。

まず乾燥させておいた粘土に水を加え、平板の上で両手で攪拌する。必要に応じて加水し、適度の水分を含ませた後、木製の槌状工具で叩きながら粘土塊を砕き、伸ばしてゆく(図4-①)。槌状工具で叩くことによって、粘土塊を均一な大きさにし、さらに水を加えることによって可塑性を与える作業である。同時に、この作業を行いながら、粘土中に含まれる小石などの不純物を念入りに取り除く。

②成形

成形は既述の底部付近の作出、底部から胴部の作出、胴部から頸部と口縁部の作出、口唇部の作出と大きく三段階に分かれ、基本的に土器は正位に置かれ作業が進められる。また各段階にはそれぞれケズリとナデが存在する。ここでは成形と整形とに別々に記載するが、輪積み成形↓ナデ↓ケズリが一つの組み合わせとなっている事をあらかじめ指摘しておく。

下地準備を経た粘土塊から適当に手でちぎり取り、それを平板の上で直径一〇mm程の棒状になるように上下ないし

は左右に回転させ粘土紐を作出する(図4-②)。その後粘土紐をコイル状に巻き上げ土器の底部を作出する。その際地面に座った状態で膝のあたりで足を交差させ、膝と膝の凹部付近に粘土を載せて巻き上げる(図4-③)。これは他の製作者にも共通し、当域一帯に通有する技法と考えられる。巻き上げ時は時計と逆回りに動かしながら積み重ねられていき、直下の粘土紐の外側縁に積み上げてゆくため、器形は底部から口縁へ向かって直線的に開く(図4-④)。内面や外面の輪積みは指ナデによって磨り消してゆくが、このときの指ナデは上から下にかけての動きが主体的であり、その逆は僅少である。ナデに用いるのは中指を中心に、人差し指を添えるしぐさが多く窺えた。

③整形

整形はケズリとナデの工程がある。ケズリはアナダラ属系と考えられる貝殻の側縁や殻頂を用いて、余分な粘土を掻き取るように土器の内外面に施す(図4-⑤)。そのためケズリ直後の器面には貝殻の条痕が幾重にも重複し、微細な凹凸が器面全体を覆う。この条痕は、通常ケズリ後に連続するナデによって平滑化され消えてしまうものの、土器内外面に薄く条痕が残る個体も存在する。筆者の管見では、底部が球形に近い丸みを帯びた個体に条痕が残存する場合



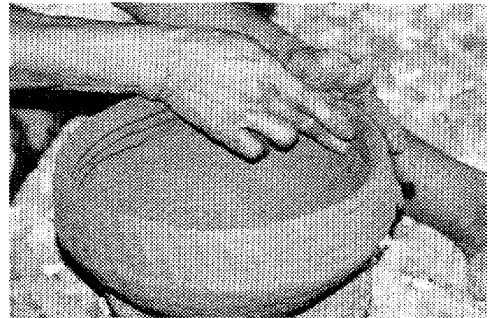
①素地の準備



②回転による粘土紐の作出



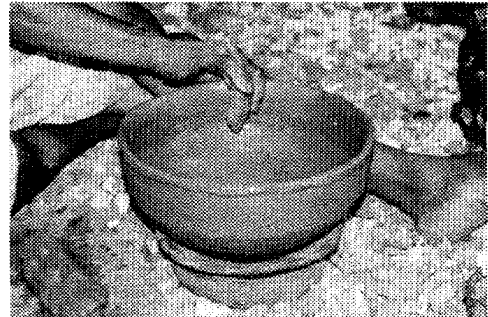
③輪積み成形・底部の作出



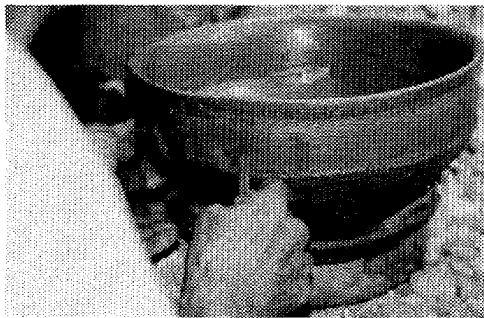
④輪積み成形・口縁部の作出



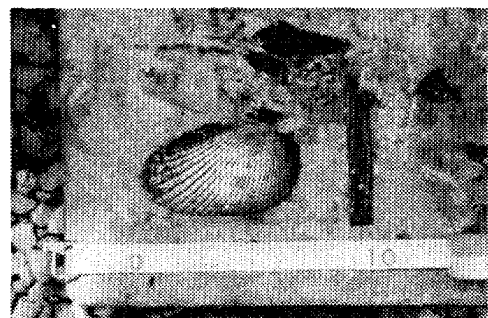
⑤貝殻側縁によるケズリ



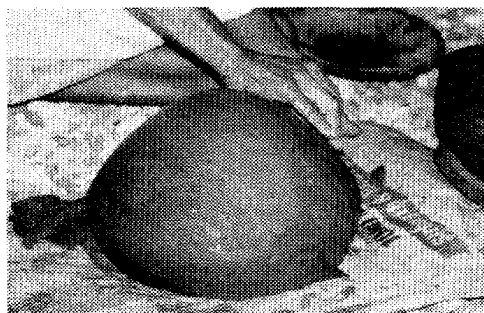
⑥内外面の指ナデ



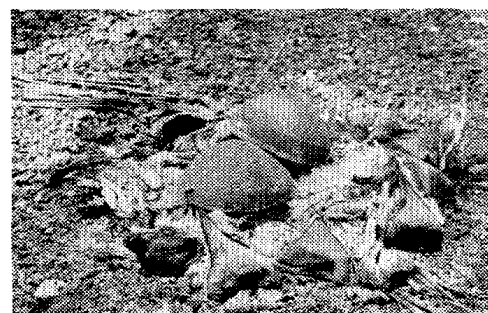
⑦櫛歯状工具による施文



⑧工具



⑨乾燥途中のナデ



⑩焼成

図 4

があり、内面底部にやや多い。

ケズリの工程は、土器内面のケズリ、外面のケズリの順が見受けられ、内外面のケズリがセットとなっている。その際には、常にケズリが施される面とは逆の面に手を当て器形や器壁がケズリによってゆがみ・破損が起きないように防いでいる。ケズリによって、貝殻の内側に掻き取られた余分な粘土はその都度取り除かれ、その粘土は成形に再利用される。また、貝殻の外測縁を用いるケズリは、土器の外面など器厚を揃える時に用いられ、より微細な整形によく用いられるようである。

整形段階の指ナデも成形段階とほぼ同様の工程であるものの、成形段階に比べて水を多用する(図4-⑥)。これは土器を湿らせるといよりはむしろ濡らす行為に要因があると考えられる。ナデには水の入ったボールなどの容器に手を入れ十分濡らし、その後手のひら全体で土器の内外面を撫でてゆく。ナデ方向は一定ではないが、底部から手面付近は横位に回転するように施し、口縁から胴屈曲部付近には、器壁を人差し指と中指の二指で挟み込みそのまま横位方向に撫でる。前者が器面の平滑を中心とする行為であるのに対し、後者は器面の平滑化とともに、器厚の均一化を意図したものであると考えられる。後者は、同時に口径の調整も兼ねているようであり、土器が破損しない範囲で

口径を増す作業も兼ねている。

④文様

文様は口縁部から胴屈曲部にかけて施される。施文具は *Giluna* と呼ばれる二本から複数本を単位とする櫛状工具である(図4-⑦・⑧)。文様は大きく同工具による沈線文と、ケズリに用いた貝殻の連続刺突による二つの文様要素に分けられる。前者は器面の基本的な文様を作出する際に用いられ、後者は胴部と口縁部を画する際の区画的な横位方向の施文に施されている。施文は輪積みと同様に左回転に横位に施されており、胴部上端に貝殻の殻頂の押圧なしいし刺突による横位の区画文↓口縁上端に櫛状工具による横位方向の波状沈線↓前二者によって描かれた文様の間に櫛状工具を用いた単位文様を横位に施すという順番で施文されていく。なお当該製作者は我々の聞き取り時に約二〇種類もの基本文様を描いて見せたが、おそらく彼女の脳裏にはそれ以上の文様要素が存在し、器形や土器の使われ方、機能などに応じて基本文様を幾重にも組み合わせる幾重もの文様パターンを生み出している事が推察された。

⑤乾燥

文様が施された段階で土器は一旦乾燥させられる。乾燥

にはその時々々の気候により、我々の調査した雨季には一週間以上の日数が費やされていた。ただし、その間にも、微細なケズリやナデなどの調整が間々行われており、ある程度土器が乾燥してくると、土器を逆位に据えて底面付近を集中的にケズリやナデ等を施す場合も散見された(図4-⑨)。その際には水は使わない、もしくはごく微量であった。

⑥ 焼成

焼成は、一個体から数個体を単位とするもので、主に家屋の脇などの敷地を利用して行なう。焼成場所はある程度決まった場所で行われているようであるが、特定場所というわけではなく、焼成を特定できるだけの灰原や焼土塊などが目立つ程の様相を呈してはいない。

焼成には、ヤシの枯葉や枯れ枝、幹、そしてヤシの実の外皮が用いられており、特に外皮は頻繁に火にくべられていた。これは、日常の食事においてヤシの実が多用されており、その外皮が入手・利用しやすいためである。こうした外皮を雨水がかからない場所にまとめておき、土器の焼成時に用いるようであった。

まず焼成時はこぶし大強の石を三角形になるよう三カ所におき、それらの上に土器を逆位となるように置くのが通

例である(図4-⑩)。地面に直接土器を置くことはしない。これは内面に火熱が行き渡る工夫と考えられ、同時に器面全体に均一に火が行き渡ることで、焼成段階の破損率が低くなるように工夫された結果である。したがって、焼成範囲はこの三角形より大きくなることはなく、概ね四〇から五〇cmの範囲に収まっていた。

次に、既述のヤシの外皮で土器をまんべんなく覆い、さらにその周囲をヤシの幹や枯れ枝などで葺くように覆ってゆく。このとき既に土器の周りには下火がつけられており、その火を覆うように外皮をかぶせ、さらに幹や枝で覆ってゆくのである。幹や枝で覆い終わると、それらに直接火を付け、全体に均一に火が回るよう枯れ枝などで手を加えながら、随時燃料材を加えてゆく。焼成が終わるのは概ね三〇分前後であり、取り出して熱も冷めやらぬ土器にココナツの絞り汁を粗くかけて器面をコーティングし、土器器面を緻密化させ、そのまま自然冷却させる。(井出浩正)

(2) 器種構成

ミルンベイ州・中央州の各地で見られる土器製作文化では、浅鉢(nan¹)が基本的な器形と考えられている(Ross 1996)。つまりこの地域では、パプア・ニューギニアの他地域で一般的に見られる壺・水甕・炊事鍋・皿などの器形

表 3

	器種	用途	器種名の意味(Tawala語)
在地	nau/giluma/nauhota	儀礼・日常用炊事	一般的な土器
	pidola/ogu-pelopelo	日常用炊事・埋葬	段がついた土器
	habaya	スープ状調理	
	gumasila/wogo-kalakala-pupu	日常用炊事・水甕	gumawana 島の土器
	nu-kikei	子供用	子供が作った土器
模倣	wogo-wale-wale	儀礼・日常用炊事	wali 島をまねた土器
	wogo-mai-mailu		mailu 島をまねた土器
搬入	wali 島・misima 島・mailu 島		
	gumawana 島・goodenough 島	日常用炊事	

の別が、確認できないということである。しかしこれら機能や用途の別が、本地域に存在しないという事ではない。単一の器形である浅鉢が幾つかに作り分けられ、いわば細別「器種」の別が確立しているのである。特定地域で作られて

いる器種の組み合わせは、地域的特徴を反映した「器種構成」だと考えられる。

調査対象地域であるイーストケープでもこうした器種構成が観察されている(表3)。

聞き取り調査を行った三十名余りの土器製作者たちによれば、本地域で土器製作を身につけた女性ならば器種構成に対する認識が共通している筈、ということであった。しかし実際に、土器製作技術の習熟度に個人差・集

団差があるため、当然ながら器種構成の認識にもズレが生じていた。ヤバム島(高橋他 二〇〇七)、ケヘララ(高橋他 二〇〇八)、二〇〇七年度の調査地であるトパそれぞれで、やや異なる情報が収集され、現在比較作業を行なっている。

そこで本項では(1)に引き続き、土器製作の偉大な「名人」とされる土器製作者(D女史)の認識に基づいて、イーストケープ伝統の器種構成について概略する(表3)。まず在地・模倣・搬入という三つのレベルに大別して土器を認識していることに着目したい。この分類は、本研究のテーマの一つである外来系土器の認識に関連するので重要である。

在地系の器種には nau・pidola・habaya・gumasila・nu-kikei の五つがある(May and Tuckson 2000[1982]:10-16)。それぞれの口径・器高の平均値をとると区分できる事が分かる(図6・表4)が、散布グラフ(図5)では各器種が明瞭に分かれるとは言いがたい。本地域の人々は、文様・器形などの特徴を重視して各器種を区別していると考えられる。ただし「名人」が作った土器(図5白抜き・写真4)は器種同士の重なりが殆ど見られない。意識して作り分けられた結果であろうか。他製作者との技術を細かく比較する事が求められる。

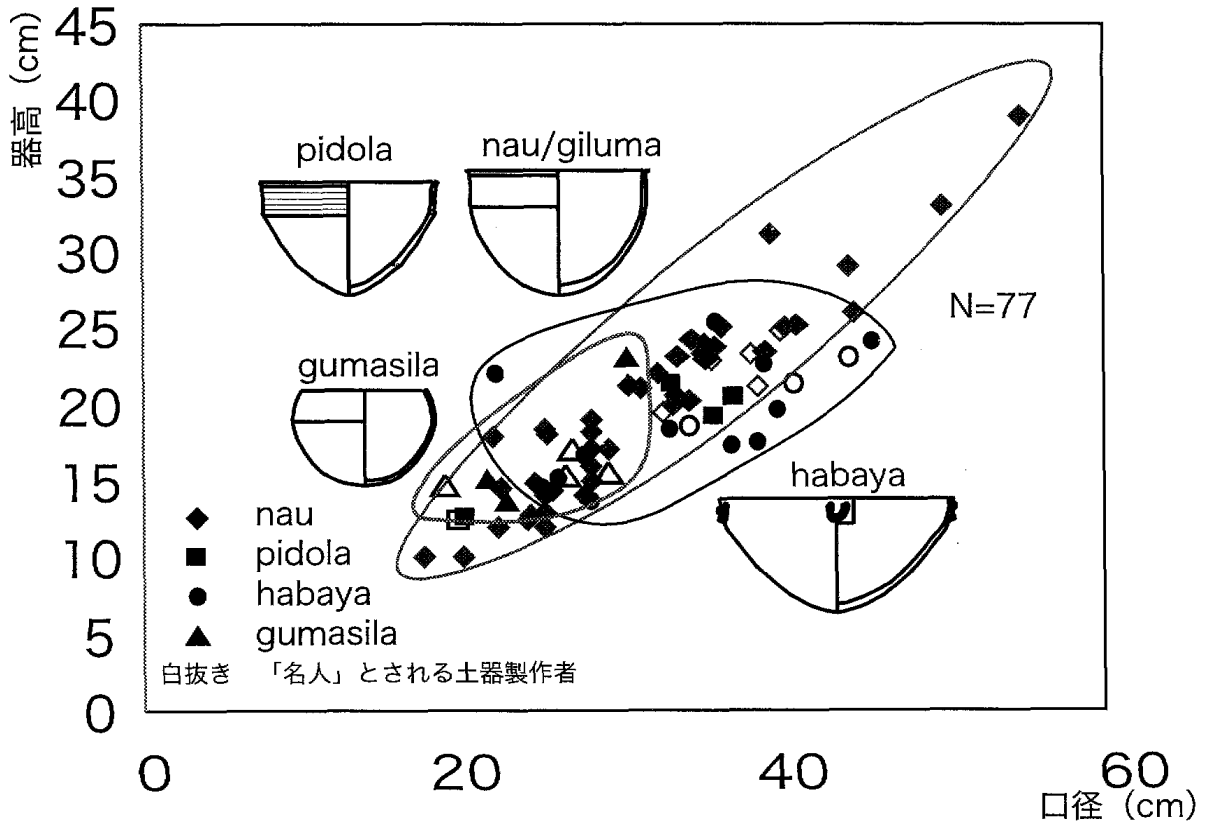


図5 各器種のサイズ (横軸：口径、縦軸：器高)

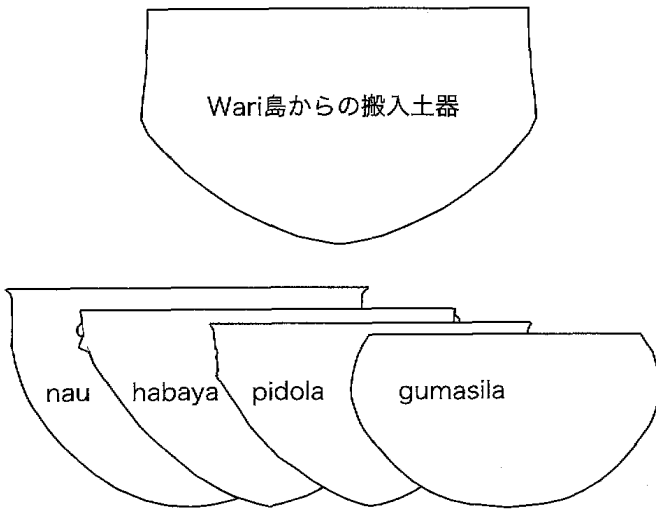


図6 各器種の相対的大きさ

表4 各器種の平均サイズ

器種/サイズ	口径(cm)	器高(cm)
nau	32,2	20,2
pidola	29,3	17,2
habaya	33,5	18,3
gumasila	25,1	16,1



写真4 「名人」が製作・所有している土器

他地域から搬入された土器は各集落に必ずと言っていいほど確認できるが、その製作地を正確に認識しているのは、「名人」であるこの製作者を含めごく少数の女性に過ぎない。聞き取り調査で最も頻出する表現である「ワリ (Wari) 島の土器」は、半ばブランド化しており、由来に関わらず「搬入土器」一般を示す用語だという。

注意すべきなのが、これら搬入土器を真似て作られる模倣土器である。「〜のように」という意味を表す Wogo という接頭辞をつけ、wogo-wale-wale (Wari島の土器のように作る) のような器種の呼称を作り出すという。このような器種を作る製作者は限られており、何世代か前に直接的な技術の導入があったらしい。模倣技術の実際とその拡散過程について明らかにするため、追加調査を行う必要がある。

(根岸 洋)

おわりに

本報告では、調査参加者がそれぞれ分担箇所を決めて、成果を論述した。根兵は、調査地域の地理的特性と、家屋形態や集落の配置について、もっとも簡潔に報告した。GPS データに基づき、海岸線と村々の位置、および家屋群の位置を地図上に記録できたことは、基礎的データが何も

ない地域調査において大きな収穫であった。

また、中門はダワタイ村およびそのバラバラーナ関係にあるググヒニポララ村の親族構造について、数代に遡る系譜関係を詳しく聞き取ることができた。ダワタイにおいても土地所有権や財産などは、母系を通じて継承されており、その点で隣のケヘララと変わるところはない。現地では土地所有者である一人の女性を「母」と尊称し敬意を払っている。彼女の差配は、所有する土地の全体的把握から、親族の土地使用に及んでいる。

当地域の親族構造の上で特徴的なのは、鳥や魚、ヘビ、植物などトーテムと結びついた多様なクランである。近年では、それらのトーテムについての特別な意識は希薄化しているように見えるが、今回の調査でもいくつかのトーテムについては認識されていたが、しかし、それが婚姻規制などで決定的な役割を果たしているようには見えなかった。少なくともトーテムのいくつかは既に役割を失っているようであった。

ダワタイの墓構成についても一端を知りえたのは有意義であった。通常、当地域では、婚姻を通じて婚入した男たちは、死とともに生まれた村に帰葬されるのが一般であるが、それとは異なって、婚入した村に埋葬された事例を一例採集できた。この事例が、現在の時代的背景によるもの

なのか、すなわち埋葬に関わる実践様式が変化して来たのか、それとも何らかの意味のある伝統的様式なのかは今後十分に調査する必要がある。

今回の調査は、パプア・ニューギニア本島の東端部に位置する地域であり、国の建設や開発から一步遅れた地域であるが、それでも現代化の波は確実に押し寄せ、近隣にモダンなホテルも登場している。伝統的な文化・社会は確実に変化しつつある。我々が調査している家庭的土器生産のシステムは、基本的に親族や地域社会での脈絡において生産・使用されてきた。同じ型式を分有し地域的な分布圏を構成した理由も、そのような地域社会を前提に成り立つわけだが、しかし、貨幣経済の浸透とともに、急速にその有様は変容しているように思われる。素焼きの土器そのものが、新たなホロー容器に置き換わりつつある。

井出は、村の女性たちからの聞き取り調査および製作の観察から、粘土の乾燥、成形、整形、文様施文、乾燥、焼成などの工程を記述した。当地域随一と称される土器製作の第一人者であるD女史の製作観察だけに、今後の研究を進める上で重要なデータとなった。

研究協力者として同行した根岸は、当地域の土器に見られる一般的形態の観察の結果から、当地域独特の器種構成を明らかにし、世代や個人的経歴によって、器種に関して

若干の認識の差異があることを見出した。また土器製作の第一人者として知られるD女史が、土器の由来に付いて、在地、模倣、搬入という三つのカテゴリーを認識していることを明らかにし、ワリ島に由来する独特の型式については、ブランド品として注意している。ケヘラヤトパなどにおいて、それらの模倣が行われ、それに関して特別の言い回しがあることを明らかにした。

これらの研究成果は、大変重要な知見をもたらしてくれた。それらは、縄文時代の土器型式に敷衍して考察する際には、土器型式の拡散と分布、型式的な継承関係などについて考える上で重要な示唆となるであろう。今後、それらについて総合的に分析して、この地域における家庭的土器生産の型式的意味を読み解く必要がある。

今回の調査で、高橋は文部科学省科学研究費基盤（C）（課題番号19520660）、井出は早稲田大学特定課題研究（課題番号2007A-028）および高梨学術奨励基金、根岸は文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の支援を受けたことを付記する。

なお、現地調査に際して、ダワタイ村の最年長であるH氏（図2参照）がインフォーマントとして協力してくれた。感謝の意を表したい。

（高橋龍三郎）

高橋龍三郎 (早稲田大学文学学術院 教授)

井出 浩正 (早稲田大学文学学術院 助手)

根岸 洋 (東京大学大学院人文社会研究科・日本学術振興会特別研究員DC)

中門 亮太 (早稲田大学大学院文学研究科 修士課程)

根兵 皇平 (早稲田大学大学院文学研究科 修士課程)

註

- (1) 本地域で行なわれてきた考古学的成果を参照すると、AD1500～1600年頃に浅鉢への変化が起こった事が想定される (Negishi 二〇〇八)。ニューギニア島北岸のワニゲラではライヌ (Rainu) 式新段階の、南岸のマイルー島ではマイリ (Mayli) 式古段階の文化層がこの画期に相当する。

文献

- Blake, D.H., K.Pajimans., J.R.McAlpine., and J.C.Saunders
1973 *Land-form Types and Vegetation of Eastern Papua*
May, P. and Tuckson, M. 2000[1982] *The Traditional Pottery of Papua New Guinea*. University of Hawaii Press
Negishi, Y. 2008 Comb and Applique: Typological Studies of Two Ceramic Traditions During the Last Thousand Years in the Eastern Papua New Guinea. *Bulletin of the*
パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査 (五)

Department of Archaeology, the University of Tokyo (22): 119-161.

Ross, M.D. 1996 Pottery Terms in Proto Oceanic. in J.Davidson (ed.), *Oceanic Culture History: Papers in Honour of Roger Green*: 67-82, New Zealand Journal of Archaeology Special Edition.

Seligmann, C.G 1910 *Melanesians as British New Guinea*

高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸 洋 二〇〇七 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査 (三)」『史観』一五六号

高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸 洋・中門亮太 二〇〇八 「パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査 4」『史観』一五八号

中門亮太 二〇〇八 「パプアニューギニア・ミルンバイ州における集落とクラン」『溯航』二二六号